
ユニゾンダイバー

零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

裏の町。(前書き)

ユニゾンダイバー。それは、
危険な仕事。普通なら学生は、
巻き込まれないのだが・

裏の町。

僕は、 龍ヶ崎^{りゅうがさき} 玲袈^{れいか} 女みたいな名前だけど。
これでも男です。

こんな僕が。あんなのに巻き込まれるわけ。

最初は、無いと思った。

けど。それは、違った。

現実では、ユニゾン世界からの町の破壊、

殺し。などが堪えない。表は、いい町だけど。裏側は、ユニゾン世界。

そして。裏側にあるその世界が。本当の姿らしい。

まったく。最悪なところに生まれた僕だが。

親は、今から20年以上前の。ユニゾン戦争で負けた。この世界には、

二つの社がある。それは、僕にもわからない。

黒い虫。(前書き)

「ちっ・っ。やっぱりユニゾン世界じゃないと。力が制限される」
僕は、普通に授業を受けていた。そして。
授業が終わる。少し前の事だ。

黒い虫。

玲袈「授業まだつづくんだね。僕は、もう飽きたよ」

隣の生徒「そんなこと言ったって。仕方ないでしょ？先生が言うんだから」

僕は、龍ヶ崎 玲袈普通の学生。

そう。授業が嫌いな男だ。

玲袈「僕は、人と関わるのがのが嫌いなんだよね。」

隣の生徒「わかる。」関わるのが嫌な僕は、クラスの人の名前ですら、

全部覚えてない。

そんな時である

生徒SD「んっ？なんだあれ？こっちに向かってくるぞ？」

玲袈「なんだ？黒い虫？はっ！みんな伏せた方が身のためかもよ？」

そのあと。あのガラスが割れる音がして。

その音とともに生徒たちが。死体にかわっていく

僕は、先生の机の下に転がりこむ

玲袈「くっ．．はあ！」

なんとか間に合ったようだ。

けど、みんな死んでいく。

僕の友達も先生もみんな死んでいく

玲袈「ずいぶん好き勝手。してくれるよね？いくよ？僕の持ちえて
いる力は、闇。」

さて。闇よ．．」

僕の周りを黒い物が巻く。

玲袈「さてと．．」

目の前に一匹飛んで来る。

それを僕は、握りつぶす。

「グシャ．．」

玲袈「さて？次は、？」

黒い虫が無数に負いかけてくる

玲袈「く。まさかこんなにはやいのか？」

目の前に一匹。それを僕は、

ばくてんからのジャンプでかわす。けど机にぶつかる

玲袈「ちっ．．邪魔だよ！！またきた。どうする？右にパンチしそいつを利用し。

ダークデカキールでも撃つか？

それとも。左に回って。スキルバインバイバー．．」

ダークデカキールは、槍のような物を

すごい速さで投げる技

スキルバインバイバーは、僕があの子の間隙について

パンチを何回もし。そして、武器に力を宿らせ

殺す。

荒技だけど。数が多すぎる。

玲袈「でも、まてよ？ここは、理科室。しかも硫酸が置いてあるその部屋に

僕は、いる。だったら！！

硫酸を取りに走る。

そして、あの机の下にスライディングそこから投げる。

玲袈「うおおおおおお！！間に合え。くっやっぱりユニゾン世界じゃないと、力が制限される。

よし！！はあ！！」

スライディングクリア。

玲袈「さて、食らえ！！」

黒い虫「グキヤアアアア」

玲袈「よし。半分死んだね。」

??「きゃっ！！多すぎ！！」

玲袈「あの声．．」

そのとき。向こうの机に

光が現れる。

玲袈「ちっ．．光かよ」

??「君、あの中に入りなさい」

さつき多すぎ!!っと言った女だ。

玲袈「僕は、闇．．光は、嫌いなんだ。」

??「力を一度、といて。入るのよ」

玲袈「だとして．．君は、？」

??「私を甘く見るんじゃないよ。大丈夫に決まってるだろ？」

玲袈「わかったよ」

??「私が、サポートするわ。」

玲袈「結構です。一人で入る」

??「異性がいいのね?OKじゃあ、せいぜい死ぬなよ?」

僕は、走り出す。

玲袈「はあ．．はあ。。僕を走らせるなんて。あの人なんなんだ?」

後ろから。虫が追いかけてくる。

虫をかわしながら行く。

右の虫 回避。

左、回避。

よし。真ん中があいた。

と思うと、またつめはじめた。

僕は、最終手段として。

突っ込む事を理解。

玲袈「この距離なら．．いけるね?はあああああああ!!」

!

虫がつめて来るのをすごい速さで。回避し。

机の前。

玲袈「いまだ!!ジャンプ!!」

成功したらしい。

その先は、同じ町だ。

まさかここがユニゾン世界の理科室．．なのか?

next
「遅かったな・玲袈。」

黒い虫。(後書き)

いきなり現れた。

なぞの男と女。

こいつらは、味方？それとも、敵？

まあ、僕は、どっちでもいいけど。

外部ダイバー！（前書き）

僕は、突然現れた光に。理科室で飛び込んだ。
まあ、黒い虫の餌食になるよりは、ましだった。
でも、そこでいきなり呼び捨てにされ、
その上、遅かったな。だつてさ。
何なんだよこいつ。

外部ダイバー！

「????」遅かったな。龍ヶ崎 玲袈。」

玲袈「君、いきなり僕を呼び捨て？そう言う君は、誰？」

「????」俺か？俺の名は、ティガイルスレイディー」

玲袈「ティガイルスレイディー？でっ？味方？敵？」

レイディー「敵か味方かだと？それは、自分で見極める・・・」

玲袈「自分で見極める？つまり。どう言うこと？」

レイディー「君は、今日から。外部ダイバーとして。俺たちと行動してもらおう。」

玲袈「そんなの僕は、聞いてないけどね？」

レイディー「ああ、言っていないからな。巻き込んだのも。俺達だ。」

玲袈「よくわからないけど。僕、忙しいんだよね。帰っていい？」

レイディー「場め・・・」

瞬間僕の前に。ナイフが飛んで来る。

玲袈「闇よ・・・」

闇の力で、そのナイフを防ぐ。

レイディー「ほう・・・面白そうだな？」

玲袈「面白そう？甘く見ないほうが良いと思うけど？ダークリギン
ド・・・！」

レイディー「なにっ？早いつ？」

僕は、そいつに向かって。

無数の槍を飛ばす。

レイディー「くっ・・・なるほど。君は、面白い力を持っているようだ
な？では、これはどうだっ！！」

奴は、手を上にかざし。何かをため始めている。

玲袈「何をする気？」

レイディー「今にわかるさ・・・いけっ！！レッドスタムーン！！」

赤い球がこちらに向かって
飛んで来る。

玲袈「ちっ．．防ぐ．．」

僕は、目の前に闇のまくをはり。それで防ぐ。
そして、相手に思わせる。

レイディー「やったか？」

玲袈「はあ？上だけど？」

レイディー「ちっ。レッドスタ」

玲袈「遅いよ。ダークエクロフィア。」

レイディー「ぐはっあ！！おい外部ダイバー。貴様の力は、どうな
っているのだ？」

玲袈「知る必要がある？あんたここで死ぬのに？」

レイディー「がはっ．．．！！！！まだだ。無数の球を投げつける。

拡散レッド」

玲袈「うっ．．まぶしい。くそっ。うわああ！！」

レイディー「やはり。まぶしいものは、嫌いか？」

玲袈「今の状態の僕ではね？」

レイディー「どう言う事だ？」

玲袈「闇に全て僕をゆだねる．．光さえもとどかない。憎しみと怒
りを．．そう、憎め。

その憎しみが力となりて。僕を動かすだろう。アドバア．．デル。
デイ。ロフトス。

デイルギル．．闇は、力に。光は、灰に．．」

レイディー「なんだ．．まあい。速さは、変わらないのだから。
光を我に返せ。」

レイディー「光よ。我が手を通して。球となり。闇を消し去れ。ト

ライアルディデンター！！」

玲袈「．．．」

レイディー「なんだ？」

玲袈「．．」

僕は、上に飛ぶ。

全てをゆだねて飛ぶ。

レイディー「なにっ？光の球を全てかわす？」

玲袈「今の僕は、光など届かない。とどくのは、暗黒、漆黒、闇。怒り。憎しみ。

妬み。殺したいと言う衝動だけだから」

レイディー「うしろ？ディメンタス」

玲袈「遅い．．」

僕は、最初にレイディーの頭を踏み、

そして、腹を蹴り。

背中を蹴る。

そして、上に上げ。

下に無数の刃を張り巡らし。

刺し殺す。

レイディー「ぐはっ．．ぐわっ．．くっ。うわああ！！」

玲袈「なんだか楽しくなってきたよ。」

レイディー「うわああああ！！」

玲袈「情けない声だね？やっぱり下は、怖い？

じゃあ、上からも。刃を！！」

レイディー「なんだと？」

玲袈「レイディーサンドイッチだね。」

レイディーが落ちていく

そして、

レイディー「うう．．ぐはっ．．」

首を絞められたように

苦しそうなうめき声を出し。

もだえている。

そして、上からの刃に、苦しむ。

レイディー「うう。。ああ．．ぶわあ！！ヴォエ！！」

苦しそうにしている。レイディーを

持ち上げ。

僕は、こいつの態度に腹が立ったから。

思いつきり。手に力を込める

その手の位置は、

相手の首、

レイディー「く．．．がはっ．．．うっ．．．」

玲袈「僕を．．．甘く見るところなるんだよ。

僕だって、あまり殺したくは、無いけどね？

仕方ないか。敵だもんね。」

レイディー「うう．．．」

??「その辺にしときなよ．貴方、本気で殺しそうで怖いわ。」

いきなりの声かけに

僕は、反応を失っていた。

レイディー「ク．．．レ．．．イか？外部ダイバー降ろしてくれ。」

玲袈「ここからが面白いのに？まあ、いいや。はい」

僕は、レイディーを降ろす。

死にそうだったからね（笑

僕は、そのクレイと言う人物の話しを聞く事に。

「私は、クレイ リパーチエ デイ ネイカ。

貴方には、初めてね。」

玲袈「それは、そうと。この馬鹿は、だれなの？」

ネイカ「口が悪いぞおーこいつは、レイディー！。

私達の仲間？かな」

玲袈「こいつって．．．貴方も口悪いんじゃない」

ネイカ「細かいことは、いいの。」

玲袈「はあ．．．」

あんまりの自分を棚に上げる。あっさりさに

僕は、「はあ．．．」とわかったのか

そうじゃないのか。訳のわからない返事を返すしかなかった。

どうやら、ネイカは、まともらしい。

そこのいきなりバトル仕掛けてきた馬鹿よりは、
ましだった。

レイディーは、いらなと思ったほどね？

ネイカ「私達は、ユニゾンダイバー。要するに警察では、解決不可
能な事件や事故を

追って。その元となる者をさばく者なの。ここまでは、OK?」

玲袈「うん。」

僕は、静かにうなづく。

あまり突っかかりたくないからね…

ネイカ「でっ、今回の事件は、警察が解決不可って、ことで。

私達がさばいていた。以上よ。質問は、？」

僕は、色々、言いたい事もあったけれど。

これだけは、聞いておきたかった。

なんで僕が巻き込まれたのかと。

玲袈「じゃあ、なんで。僕が巻き込まれるんだ？一般人だよ？」

ネイカ「貴方は、私達を選んだ。」

玲袈「選んだって？話が見えないんだけど。」

ネイカ「君は、力を持つてる。

しかも、珍しい。黒い力。

その力で。貴方は、人を守ろうとしていたでしょ？」

玲袈「確かに。僕は、守ろうとした。

けど、こんな事には、僕、関係ないし。帰っていい？」

ネイカ「かえる？町が全滅したのに？」

僕は、一瞬、疑った。

玲袈「全滅？嘘でしょ？」

ネイカ「残念…本当よ。あの虫達は、どこかの

ダイバーがやったもの。」

玲袈「どこかのダイバー？」

レイディー「俺達は、ネイル社。」

いままで倒れていた。馬鹿君が

口を開く。

玲袈「ネイル社？」

レイディー「そうだ。この町を守る。俺達には、敵がいる。」

玲袈「敵？」

レイディー「それが。クロノリア。この世界の人類を、一匹残らず殺そうとしている

奴らの事だ」

玲袈「要するに、貴方のような。馬鹿の集まりって訳ですね？」

僕は、冗談を口にしたつもりだが。

レイディー「いい度胸をしているな．．．もう一回」

玲袈「また負けますよ？」

レイディー「即答．．．」

ネイカ「今、ネイル社は、人が足りないのよ。だから。

協力してもらえる？」

玲袈「別にいいけど。この馬鹿は、仲間だと思っていないからね？」

ネイカ「どう思つかは、貴方の勝手よ。まあ、仲間になってくれるならそれで良いわ

ついてきて？」

レイディー「君は、馬鹿と言う癖をなおせ」

玲袈「貴方は、すぐに敵意を向けない事だ。

初めての人に。いきなり遅いなって、言われたら。

いい気は、しないとと思うけど？」

少なくとも、僕は、最低な気分だよ」

レイディー「すまない．．．」

玲袈「うん．．．嫌だ」

レイディー「俺と君とでは、仲良くなれそうに無いな」

この人は、何を言ってるんだろう。

さっきぼろ負けしたから。

ぶるったのか？

そう思わせる。雰囲気かバレバレだよ？

玲袈「いや．．．馴れ合いする気ないし．．．」
と言う感じで。

いきなり巻き込まれるようになってしまったのだ。
それも、平凡な学生が。
つづく。

外部ダイバー。(後書き)

はあ．．まさか巻き込まれるなんて」

あ、どうも。玲袈です。」

いきなり巻き込まれるなんて。どうなってるんでしょうね(笑)

僕敵には、いい気は、しませんけど仕方ないのかな？作者さんが言うに

僕が、後書きコメント役らしいです．．まあ、やってみます

では、次回「by玲袈。

ネイル社到着。(前書き)

「はっ？カラオケ？そんなのここにあるの？」
僕は、長い道をひたすら進んでいた。
その先には、ネイル社がある。

ネイル社到着。

レイディー「そろそろか？」

ネイカ「そうだね。もうつくはず」

玲袈「もうすぐ？」

レイディー「そうだ。もうすぐだ」

歩く事、5分。

本来なら。30分で着く予定だったようだが・・・

まさかの方向御地らしく。

僕のほうが知っていた。

いや、なんでだ？

方向御地が激しくないか？

自分達の基地だろ？

ネイカ「着いた。ふう、レイディーの方向御地がなければこんな事には、」

レイディー「なんだと？俺が方向御地？大体、お前が俺がこっちだつて、言った

道をそれたのだろう？このお菓子好きが！！」

ネイカ「なんだあ？この方向御地！！」

レイディー「うるさい！！お前なんか太ってしまえ！！」

玲袈「・・・」

この人たちは、本物の馬鹿だ・・・

そう残念に認識した瞬間だった。

玲袈「あの一・・・」

まだ言い合っている

玲袈「ピキッ・・・」

僕の中で何かはじけた。

玲袈「君達、もしかして馬鹿？僕居るのに喧嘩かよ。

みっともない」

ネイカ「なんだとレイディー貴様!!」

レイディー「何度でもいうよ!!太れ。」

はぁ．．まじかよ。

この単語を僕が使うのは、

初めてだ。

いつもなら、ほんとに?へえ? そうなんだ。

と言うように使うのだが。今回だけは、まじかよ。

と使ってしまう。

玲袈「闇よ．．このみつともない馬鹿達を、葬れ．．デ．．ダーク

イズ。ロツタ。デイ エイター

リバンプス．リド ディアーデイル。光を無へ。女を天へ。」

レイディー「うわああ!!危ないではないか!!玲袈」

ネイカ「いきなり攻撃なんて。」

玲袈「はっ?勝手に喧嘩したのは、むしろそつちかと。

この力、結構体力使うんだからさ。

やめてくれるかな?馬鹿が戯れてるみたいで。見苦しいよ。」

レイディー「．．あ、ああ。」

ネイカ「馬鹿．．すまない。」

玲袈「はいはい。それでよし。でっ?ここは、?」

レイディー「ここは、ネイル社。俺達の本拠地だ。なあ、ネイカ。」

ネイカ「．．。」

レイディー「んっ?ネイカ?おーい!!仕方が無い．．お。お嬢様、

お返事を。」

ネイカ「馬鹿．．馬鹿．．馬鹿．．馬鹿．．。」

玲袈「そうとう来てるみたいだね。僕がやろう。ねえ、ネイカさん。

そんなに気にする事は、無いですよ。だから、起き上がってください

い。ほら」

僕は、技とだ。技と。愛想いい感じで手を

差し伸べる。

それをネイカは、

ネイカ「はつな、なにを言ってる。私は 別に。」

玲袈「嬉しそうで何よりです。」
技と愛想良く言う。

僕の得意技、

まあ、おじいさんに。

おじいさん「玲袈！女を落とすときは、こつするのだ！」
と耀きながら、叩き込まれた技。

学校の宿題より

そつちを優先された事もある；

おかげで。次のテストは、僕にとっての闇だったのを
よく覚えているよ

思い出すと悲しくなってくる。

ネイカ「さ。さあ／＼行こうか！！／＼おいレイディー前を歩け。
前を！！」

レイディー「えええ〜まじですか〜俺、後ろのほうがいいんですけど。
ど。」

ネイカ「だまつて、さつさと前を歩かんかいコラっ！！」

レイディー「うっ．．．は、はい。喜んで歩かせていただきます。」
そして、いきなり。

僕の肩をたたいてきた。

僕は、人に方を叩かれるのが大嫌い。

まず触れられるのが嫌だ。

そんな僕に触れたのは、

ネイカ「お、おい。玲袈」

玲袈「勝手に触れて。何の用？」

ネイカ「その．．．お前の事、意識してもいいだろうか？」
つまり好きですって

事らしい。けど僕は、
断る。

まず面倒だから。

玲袈「ごめん。パス。」

ネイカ「あ、ああ。そうか。」

それから僕は、

一番奥の部屋に通される。

ネイル社内部だけでも怪しいのに；

そこに行く。

男が居た。

「よう、外部ダイバー。」

玲袈「誰？」

「俺か？俺は、神だ。」

ネイカ「そいつは、クレイドルス ハファイウス デライクだ。自分を神だと思ってる。」

次式過剰のデライクって、覚えとけ。」

デライク「な、なんだよ！！ネイカ。ひとがせつかく神、なのって。」

「。」

ネイカ「さつさと説明しろよ？」

デライク「こええなあ。そんなんじゃ、一生モテナイぜ？」

ネイカ「な、なんだと。いや、別にもてたいわけじゃ。」

デライク「だって、こないだ。イケメン雑誌読んで。」

「この男．．ストライクだ。」

デライク「とか言ってたじゃん？」

ネイカ「ぬっ．．クツ．．は、話をつづけるっ！！」

かなり一瞬、赤くなるネイカだけ。

僕は、別に興味ないかな。

タイプじゃないし。

デライク「んでだ。わかりやすく言っちゃえば。好きな武器取れ。」

玲袈「はっ？武器ならこの力だけで十分なんじゃ。」

デライク「駄目だ．．暴走を抑えられない。」

玲袈「なるほど。制限されてるわけね？」

ネイカは、もう。奥へ行ってしまった。

イケメンの話が。

結構来たのかな？

デライク「まあな。暴走をしたら。闇は、押さえつけるのが難しい。俺は、風。レイディーが火、ネイカの力が。雷、だからね。暴走は、止められるんだけど。」

君の、闇は、無数の事を動かす。鍵なんだ。ネイル社では、それを、キーダイバと呼ぶ。

だから、命を狙われやすいんだ。それが暴走すると。

ただ単に人を殺す。破壊の刃と化す。

それを抑えるのが。君の選んだ武器さ。」

玲袈「ふうん。なんだか難しい話だね？」

デライク「そうなんだ。だからこそ君には、武器を選ぶ必要がある。何にする？最初にとった武器は、

もう変えるな？そして、ロックをしておけ。セキュリティロックって奴をね？」

玲袈「じゃあ、僕は、この剣を二本。もらっよ」

デライクは、なんで二本？

と言う。ばればれな顔をしたが

少なくとも、馬鹿じゃない。

だから、僕は、聞く。

玲袈「二本って、そんなにまずいの？」

デライク「いや、ただ。力の流し方が難しい。コントロールできないで

消滅する、ダイバーがほとんどだよ。でも、君は、大丈夫そうだ。

よし、じゃあ。訓練だ！」

僕は、訓練部屋に通される。

そして、訓練が始まった。

デライク「さあ。来い！！」

玲袈「わかったよ。」

僕は、まず。

デライクの足を狙う事に
した。

デライク「ああ、それと。本気でこないと死んじゃうぜ?」

玲袈「甘く見ないほうがいいよ? 闇よ...」

デライク「風よ...」

やっぱり相手は、

風のように速かった。

動きがまったく読めないのだ。

デライク「ほらほら、どんな手使ってもいいぜ?」

玲袈「ク... そそうかい。アポジムルン... デイリス、テイク。

デライクバツト...」

デライク「んっ? 暗い?」

玲袈「後ろ...」

デライク「ぐわっ!!」

「ザシュ」つと音を立てて。

デライクの左足、をまず。軽く使えなくする。

デライク「そこかっ!! なに?」

玲袈「上だけど?」

デライク「うっ... くっ。ぎりぎり回避、怖い怖い。」

玲袈「次は、下。」

デライク「し、下? うわあ!! 下から。無数の刃? こりゃやばい!

! 後ろに下がればこっちの物だけ!」

玲袈「後ろがアウトなんだけど?」

デライク「なにっ... う...!!」

「サク...」

デライクの背中から、

僕が刺す。

玲袈「だから、アウトって、言ったでしょ?」

デライク「そ、そうだな... お前の勝ちだ...」

「バタっ!」

倒れるデライク。

玲袈「はっ？僕を相手にして。あっさり倒れた？大丈夫？」

デライク「ああ。問題ない」

デライクは、剣を抜き。

血のついてるままで

そこに立ってる。

ありえない光景。

目の前に。死んだはずの人が立ってるんだ。

そんな顔をしてると

デライク「どうして？って。思ったか？」

玲袈「え、あ、？うん。」

デライク「力は、鍛えると助けてくれることもあんのよ．．

まあ、普通の力の持ち主なら、死亡だけどな？

どうやら、俺には、風の精霊。キリプシュンが付いてるらしい。

お前の精霊は、闇そのものだろ？

タイプが少し違うんだよ。俺とはな。

とりあえず合格だ。

俺も死ぬかと思っただぜ。

部屋で待ってる？

あとで、この社で可愛いって有名な子が

お前の部屋に来るぜ？」

玲袈「は、はあ」

曖昧で。言葉を失ってる

僕に、彼は、

それだけ言つとデライクは、消えていった。

僕は、呆然と立ち尽くす。

彼の後姿を見ながら。

ネイカ「おい。おい！！」

ふと現実に戻される。

僕は、力の解除をし。

ネイカの話の聞く態度を取る事に専念する

ネイカ「お前、すごいな！！さて、部屋だ部屋。

実はさ、あいつを打ち負かした奴だけが入れる。

部屋があるんだけどさ！！行こうぜ！！」

玲袈「は、はあ。」

僕は、また。

ついていく

どこまでも。

そして、その部屋に着く。

玲袈「広いね。」

ネイカ「ああ！！じゃあな」

玲袈「デライクが言った人気って、誰だ？」

そうこう考えているうちに。

眠りに落ちていた。

そして、

??「あの・・・起きられますか？」

女の顔がめちゃくちゃ近くに

ある。

僕は、こう言うのには、

弱い

玲袈「うわあ！！な、なに？」

「おどかして・・・すみません。私は、レイナ スペイド リマルー

シイです」

玲袈「リマルーシイさん？」

リマルーシイ「そうです。食事をお持ちいたしました。」

玲袈「どうも。ああ・・・疲れた。なんか息抜きがしたいな。」

「くすっ」

リマルーシイが笑う。

僕は、近くに来た人の
笑顔も弱い。

玲袈「何を、笑ってるの？」

リマルーシィ「息抜きですか．．では、カラオケにでも行きましょ
うか。私．．歌好きなので。」

玲袈「カラオケ？そんなのここにあるの？」

リマルーシィ「あります。」

食事を食べ終える。

すると、リマルーシィが

案内してくれた。

リマルーシィ「ここです、では、ごゆっくり」

玲袈「一人は、なんとなく虚しいから、ルーシィも歌えば？」

リマルーシィ「いいんですか？．．」

玲袈「だって、歌は、一人だとつまんないからね」

リマルーシィ「ありがとう．．失礼します」

それから、僕達は、

一頻り歌う。

リマルーシィ「次は、これ．．」

玲袈「なかなかうまいね。」

リマルーシィ「ありがとう．．」

どうやら、ルーシィは、

とても純粹らしい。

だから、クールなのかな？

僕は、クールは、うるさい奴と違って

好きだ。

玲袈「呼び方さ。」

リマルーシィ「呼び方。ですか？」

玲袈「うん。リマルでいいよね？」

リマルーシィ「そ、そんな。照れるような呼び方．．」

玲袈「でもそれの方が呼びやすいから。」

リマルーシィ「ありがとう」

とても素直な子だった。

玲袈「もしかして、赤くなってる？」

リマルーシィ「そんなこと・・・」

玲袈「ばれてるよ？」

リマルーシィ「恥ずかしい・・・」

玲袈「まあいいや、どんどん歌おう。」

僕は、久しぶりに楽しめた。

こんな楽しみがあと何回続くのだろうか？

僕は、楽しみにしながら、歌っていた。

ネイル社到着。(後書き)

「ふう。あ、どうも。玲袈です。レイディーとネイカには、困ったものだよ

あんな所で喧嘩かよ。人の目の前では、やめてほしいな。

あの二人、止まらない。そして、リマル。

あの人は、なんか。特別って気がするよ。

じゃあね」by 玲袈

ネイカ・テロ（前書き）

僕と。リマルは、楽しく歌っていた。

フリータイムで。

すごく楽しかった。あれが起きるまでは、ね？

ネイカ・テロ

ネイカ「ふう．．．買い物なんて久しぶりだからなあ。いろいろ買すぎて疲れるよ。」

なにか面白いことは、ないのかい？なあ空。」

「へえ．．．面白いこと探してるとこ悪いけど。」

ちよつときてくれないか？」

ネイカ「貴方だれ？私を口説くには、ちよつと違う気が」

「．．．。」

なんだこいつ。

なんか予想以上にむかつく。

「ピッ」

俺は、徐に電話番号を打ちかける

「なんだ？」

「おい、本当にこの女で間違えないのか？」

「ない．．．」

「そうか」

俺は、携帯を切る。

ネイカ「なんだい？いい口説き方でも聞いてきて．．う．．」

「貴方には、少々、返せない理由があります」

私の倒れ際にその黒いマントの青年は、言う。

「気絶確認、もうこんな事は、俺に任せるな．．いらつく奴しかいない」

「それは、悪かったね。」

笑い混じりにそう言う。あいつが俺は、好きではない。

やり方が汚すぎる。

「さて、ネイル社がどう動くか楽しみだな　ふふ」

玲架「リマル上手いね。歌手かなんか？」

リマル「はい、いえ、そうではなくて、幼いころ．．父とよく歌い

に行つてた者で。」

玲架「へえ、そうなんだ。で？親は、？」

リマルーシィ「死んだ．．いや。殺されましたよ。あの戦争の時にね．．．」

玲架「あの。20年以上前のユニゾン戦争だっけ？」

リマルーシィ「そう。あの汚れた戦争。その時に私の母は、クロノリアのリーダーで。」

一人の母を殺した」

僕は、まさかと思つた。

そこで、僕の母の名前を言うとは、思わなかつた。

玲架「へえ．．その母名前は、？」

リマルーシィ「龍ヶ崎 錬架．．」

玲架「なんだつて．．錬架？本当に？」

リマルは、こくん とうなずく。

僕は、思つた。

絶対にリマルを許さない と

玲架「へえ．．リマルのお母さん。人殺しだつたんだね．．」

リマルーシィ「人殺しでは．．」

玲架「黙れ．．」

リマルーシィ「えっ？」

玲架「リマルのお母さんが殺した。その人。僕の母なんだよ。

残酷だよ。こんな事しなくちゃならないなんて。」

僕は、殺気をだす。

玲架「僕の父は、狙撃主．．殺したのは、リパーチェ デイ ユイ力。」

リマルーシィ「どうして、今言つてしまつたんですか．．私の母です」

玲架「やつぱり．．戦争なんていらぬ。」

リマルーシィ「父は、？」

玲架「男は、全員特攻したらしい。」

リマルーシィ「そうですか。」

そこに電話がある

「テルルル!!」

玲架「もしもし。」

スレイディー「やっと．．つながったか。ごほっ!!」

玲架「どうしたの?」

スレイディー「どうやら、クロノリアが動いたようだ。

ネイル社が襲われた．そして、ネイカがテロされた。」

玲架「ネイカが．．?」

スレイディー「そうだ。ぐわはっ!!

俺は、しばらく動けそうにない。だから頼む。

そこに居る仲間とネイカを助け出してくれ。

そして、戦争をなくしてくれ．．

もう。人が死ぬのを見たくわないのでね。

ちっ．． また攻撃か。ルートを説明する。

まず。お前たち二人は、これから。

海に潜ってもらう。

そして、深海まで潜ってくれ。

そこに水中都市がある。」

玲架「その都市を。つぶせって事だね?

でも、なぜネイカが?」

スレイディー「俺にも詳しいことは、わからない。

だが。ネイカをつかって。何かの戦争を起こそうとしているのは、

事実だ。」

玲架「僕たちは、何をすればいいの?町をそのまま。爆破?それと

も闇でうめつくす?」

スレイディー「違う。そこに居る。デナメール ディコウ テナル

と言う。男を

倒せ．お前も名前くらいは、知ってるであろう?」

玲架「闇を極めたと言われている。」

スレイディー「お前の闇よりも強力だ。気をつける。

ああ！！スレイディー大佐助けてください。

怯むな。殺せ！！

では、きるぞ」

プチつと音を立てて切れる。

そして、僕は、

リマルに説明をする

リマルーシイ「なるほど。分かりました」

玲架「ひとつだけ。忠告させて？」

リマルーシイ「なんです？」

玲架「もしも君のミスでこの作戦が失敗したら。

僕は、君を殺す。」

リマルーシイ「私も同じことです．．」

玲架「じゃあ行こうか？」

デライク「おいおい。お二人さん？二人で盛り上がってんじゃねえよ？

すげえー面白そうだな。俺もまぜろよ？」

玲架「いいよ。」

リマルーシイ「人が多いのは、いい事です。」

玲架「さて．．行こうか？」

僕たちは、カラオケ部屋を

出ると走り出す。

周囲には、悲鳴と銃声。

玲架「もう。ここまで殺されてるのか！」

デライク「相手が相手だからな．．」

玲架「そういえば。リマルは、戦えるの？」

リマルーシイ「私は、氷です。」

玲架「なるほど。さて、蹴散らしてから行く？」

デライク「少しは、楽しむか！！玲架。敵の真ん中に行くぞ」

玲架「言われなくても行くけどね？」

デライク「物分りがいいこつた。」

リマルーシイ「私も行きます．．．」

敵「ハハツハ！！よええなおい！！ネイル社つてのは、よお？こんなに弱いのか

ぐわっ！！」

玲架「クロノリア兵つて、こんなに弱いのか？」

クロノリア兵「てめえ！！何もんだっ！！」

玲架「僕？僕はね！！」

「グリっ！！」

クロノリア兵「ぐわっ！！」

玲架「闇の住人さ。」

クロノリア兵「闇の住人だと．．．」

玲架「ほらほら、楽しくなってきたよ。ふふふ。

ダークステインデイル！！」

クロノリア兵「あああ、うわあ、うわあ、ぎゃあああああ。あつぐわ．．．」

玲架「さあ行け！！無数の刃よ。この愚かな兵達を串刺しにしようねっ？」

兵達「あああうわあああ！！うっ。」

「ザクザクザクザク！！」

玲架「あはは！！この音だよ。

罪の重さを分かる音！！

最高だよね。

たとえば」

クロノリア兵「う、うしろ！！」

玲架「後ろから狙って殺そうとする。罪とかね！！」

「サク」

僕の剣が切れ味のいい音で。

相手を刺す。

ネイル兵達「おおお！！玲架さまあああ！！」

玲架「うつ．．」

女兵「玲架さまああああああん！！」

玲架「じゃあ、これが終わったら。みんなで焼肉ね？」

女兵「はい！！」

男ネイル兵「了解です。」

玲架「さて、もう少し楽しもうかあ！！」

デライク「おいおい。弱いなおまえら」

クロノリア兵「何だこいつは、！！撃て！！」

ふっ．．でかい事言う割には、たいしたことないな！！ははっ！！」

デライク「風よ．．切り裂け。かまいたちの風！！」

クロノリア兵「わあ！！」

デライク「おまえらさあ。」

クロノリア兵「なんだ？」

デライク「人をあんまり舐めんじゃねえぞ？くそが。

さあ、風たち！！仕上げだ。

愚かなる兵達は、

風とともに

舞い上がり。

風とともに

砕け散る！！」

「ヒュウウウウウ！！」

クロノリア兵「ああああ！！」

デライク「ふう。暑い」

「ヒュウウウウ」

デライク「おつ。ありがとよ。さて、あっちだ」

リマルーシイ「氷よ．．あの者たちへ氷で素敵なおもてなしを。

性格変更！！あれ？貴方達？もつと楽しませてくれるんじゃないかっ

たの？

もう、凍っちゃったのね？つまらない。アハハハ！！」

リマルーシイ「性格戻し。やっぱり性格変更は、「きついかな．．」

クロノリア兵「後ろだぜ？氷女？おいお前ら、こいつこのまま。
さらって襲おうぜ？」

リマルーシィ「ちっ．．．」

玲架「さらう前にそのこに触れることができる？」

クロノリア兵「なにっ？兵達が宙に浮いていく。」

玲架「そうだよ？君も同じさ。ダーク。デイルカイン．．

闇は、光を食らいつくす」

クロノリア兵「ああ．．うわあ。く、首がねじれる．．ああ．．．」

玲架「もうその姿は、なかった。ってね？」

デライク「風よ。うおおおお！！！」

兵達「うわあああ、うわあああ。ひやつあー！」

玲架「遅いね」

デライク「敵が邪魔でさ。」

リマルーシィ「あの、玲架君．．」

玲架「んっ？何？」

リマルーシィ「ありがとう」

玲架「まっすぐに言われると。照れるけど、う、うん。どういたしまして。」

デライク「あとで。結婚の用意」

玲架「うるさい！！！」

リマルーシィ「あの．．なにか？」

デライク「あのな。玲架がな、げばらっ！！！」

玲架「なんでもありません。」

「バタっ」

デライク「いててて。わりいわりい」

玲架「さて、次は、水中都市つぶしだね．．」

デライク「水中都市つぶしてなんだ？」

玲架「すごく．．楽しいことだよ。」

リマルーシィ「そうですね．．」

「デライク」なるほどな？」
つづく

ネイカ・テロ（後書き）

「どうも、リマルーシイです。戦いに参加するのは、初めてです。次回も。楽しみ．．」

「よっ！風が使えるデライクだ。

どうやら、玲架の嫁。決まったぜ？

くはっ！」

玲架「はあ．．うるさい風だ。

では、次回。水中都市か．．どんなどころなんだろうっ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3097y/>

ユニゾンダイバー

2011年11月10日03時03分発行